

株式会社 菊地漆器 1872(明治5)年創業

かつて欧米で陶器は「china」、漆器は「Japan」と呼ばれていたことから判るように、漆器は日本古来の芸術美として世界中の人を魅了してきました。その高い装飾性と実用性を今に伝える専門店「菊地漆器」。100年以上にわたり宮の人々に愛されてきた老舗の新たな取り組みを取材しました。

アンテナは常に高く、リスクは最低限に

会津塗の歴史は古く、1590

(天正18)年に豊臣秀吉の命を受けて会津領主となった蒲生氏郷公が日野(滋賀県)から木地師や塗師を呼び寄せ、産業として奨励したのが始まりと言われています。16世紀後半、会津塗の技術は飛躍的に進歩を遂げ、華やかさと上品な落ち着きを併せ持つ会津塗は「めでたい席にふさわしい漆器」として多くの人に愛され続けてきました。

(株)菊地漆器は、その会津塗の産地、福島県会津若松市に1872(明治5)年に開業しました。現在地と同じ宇都宮市の大通り沿いに店を構えたのは1895(明治



重箱や宝石箱など創業時から伝わる漆器の数々。手前の糺(なつめ)は人間国宝・前大峰氏の作品

28年)。戦前までは会津塗の専門店として営業を続け、石川県の山中塗や輪島塗、和歌山県の紀州塗、高岡塗(富山県)、越前塗・若狭塗(福井県)など全国の産地を訪ね歩いてバラエティに富んだ漆器を扱う専門店となったのは、先代(現会長)の時代。それまで会津塗が主流だった栃木県に全国の優れた漆器を紹介し、近代漆芸の名工として全国に名を馳せた人間国宝・前大峰の作品などの最高級品まで商うようになりました。

「私が大学を卒業して店に入った頃は、バブル真っ只中の全盛期。ギフト品として高級漆器が飛ぶように売れていました。子供のころは大通り沿いに漆器専門店が他に2軒くらいありましたが、今、全国の漆器を扱う漆器専門店が北関東で1軒、当店だけになってしまいました」と話す4代目の菊地一郎社長。昭和から平成へと時が移り、バブルが崩壊した後、日本人の価値

観やライフスタイルは大きく変わりました。特に先代から店を継いだここ10年の変化は大きいと言います。「今は、マグカップで味噌汁を飲む時代。塗り箸はコンスタントに出ますが、汁椀は少しずつ売れなくなっています。また、ギフトの多様化により主力商品がなくなりました。漆は、熱に強く、天然塗料としては極めて優秀な素材です。でも、今は職人が減り、修理をして使い続けることも難しくなっています」

そんな中、菊地社長は、新たな商材の開発に積極的に取り組んできました。「父と比べて私は慎重派。これまでの商品とまったく関係のないものには手を出しません。だから継続して来られたのだと思います」と自身を分析しますが、百貨店とのコラボレーションで漆塗のオリジナルパーティーセットを開発したり、他社に先駆けてカタログギフト販売を手掛けたりと、その先進性はかなりのもの。「常にアンテナを高くして、

情報を得るように心掛けています。インターネット販売も検討しましたが、この業種の場合は、他の人がやらないような方法でなければ成功は難しいですね」と先を見つめる目は冷静です。そして今、最も力を注いでいるのは、宇都宮餃子会と模索・考案中である「餃子箸」の製作です。各餃子店の箸を木製の本漆塗箸に変え、エコ活動の一環として修理しながら使い続ける上に、お土産用の箸も販売しようと検討しています。「もつと漆器を使ってほしい」そんな菊地社長の願いが生んだ宇都宮の「餃子箸」は、間もなく完成予定です。



リーズナブルな漆器や箸、和の伝統工芸品が並ぶ店内

株式会社 菊地漆器

宇都宮市大通り2-3-6

☎028-634-3144(代)

〈営業時間〉

9:00~17:00

〈休日〉

日曜・祝日

※このコーナーは隔月で掲載します。



代表取締役社長の菊地一郎氏